

保育者の発声の現状

—インタビューからの考察—

Vocalization of nursery teachers

Consideration from the interview for nursery teachers

永津 利衣

愛知みずほ大学短期大学部

Rie Nagatsu

Aichi Mizuho Junior. College

Abstract

Some of the students majoring in the childcare course are introversive and talk quietly. It is ideal to master the adequate vocalization method while studying, before they are hired at a nursery school, because nursery teachers have to speak a lot. Therefore, as a preliminary survey devising vocal training in the childcare course, I interviewed directors and chiefs who have a long experience working at kindergarten and nursery school and young nursery teachers in their second year about how to use their voices and physical troubles of vocal organ. In this research, I summarized types of vocalization that have been carried out at kindergarten and nursery schools. Their vocalizations are intentionally used depending on the children's age in the classroom and the number of children. In particular, the experienced nursery teachers with rapport with their children tend to have rich expressions, in addition, they distinctively use a type of vocalization according to the feeling of the children.

キーワード：保育者の発声、SCAT

Keywords: Vocalization of nursery teachers, SCAT

背景と目的

保育士や幼稚園教諭（以後、保育者とする）にあこがれて短期大学に入学してきた学生の中には、おとなしく声の小さな学生が毎年少なからずみられる。単語で話すことが多く、明確な声で長く話をするには慣れていないと思われる。本学保育士養成課程の学生への発声に関する質問紙調査（永津・大久保、2015）では、短大入学前に人前で話した経験がない52%、人見知り49%、大勢の中での会話が苦手34%という回答があり、学年間に多少の差があるとは思われるが、保育者を目指すものの、他者との会話や人前で話すことに苦手さを感じている学生は少なくないといえる。

志村ら（2014）による日本の保育室の音環境に関する研究では、保育活動時間帯の音量の平均が70～90dB（騒々しい街

頭～地下鉄の車内の音量レベルに相当）、最大値は90～100dB（地下鉄の車内～電車のガード下の音量レベルに相当）と報告されている。このような音響下で、保育者は子どもの名前を呼んだり、終了の合図を伝えたりしなければならない。十分な声量を出した経験が少ない学生が、何の発声教育もなされず保育現場へ出ることを考えると、子どもに届く発声が可能なのか、そして、長い保育者人生の中で喉を傷めず、良い声を保持できるのだろうか、という懸念を感じる。

保育における発声の先行研究は、歌唱に関することが中心である。吉永（2016）は、保育士、幼稚園教諭と小学校教諭らに声のイメージに関する相互評価調査を行い、保育者（原文では保幼教諭）の声には、「明るい」「親しみのある」「元気な」「豊かな」といった活動的で明朗なイメージと、高音

で軽やか、柔らかで優しいという女性的なイメージの評価が小学校教諭よりも高く、また、因子分析で得られた「明朗性」「柔らか・女性性」という2因子から、保育者の音声の表情の多様性を述べている。この研究は歌の発声以外に視点を向けているが、イメージの調査であり、実際に現場でなされている発声や、保育者の発声トレーニング、発声改善に関する体系的な研究はない。これは「話す」ことが障害や病気の無い限り、日常的で自然な行為であり、例えば滑舌が悪くても聞き取り可能であれば、問題に取り上げられることがないためであろう。また、平成29年度の保育士養成課程の学生への発声に関する質問紙調査では、自分の声が好きかという質問に対し、76.4%が否定的な回答をした。多くが外見に気を配る一方、好まない自身の声に改善を試みることはしていないのではないだろうか。音声は時間と共に消えて無くなるゆえに、声に関しては無頓着といえよう。

しかし、耳鼻咽喉科医による発声に関する書籍には、学校の教師と並んで保育者の嗄声やポリープなどの相談事例や防止策が挙げられている(米山, 1998; 文殊, 2016)。また、インターネットに「保育士 発声」と打ち込むと、現場で働く保育士の発声に関する悩みが列挙される。子どもとの関わりや保護者対応といった保育実践そのものの悩みの水面下で、発声の問題を抱えている保育者の多さがうかがえる。巷で出版されるボイストレーニング関連の書籍の多さからも、声に対する需要の多さを物語っているのではないだろうか。

羽石ら(2013)は声を酷使する音楽療法士の発声トラブルや声の衛生に着目し、その改善プログラムの開発に着手している。音楽療法士は30~60分程のセッション中、常に語り歌い、集中して声を使う。一方、一日の多くを保育現場で過ごす保育士は、発声時間が長く(米山, 1997)、さらに前述のように音量の大きい場面や運動場での発声もある。この点で話すことを生業とするアナウンサーや俳優、音楽療法士などと、保育者の発声行為は大きく異なる。

このような背景から、保育士養成課程の学生たちが在学中に何らかの効果的な発声トレーニングを受け、正しい発声法が修得されていることが理想だと考える。では、保育者のためにどのような発声教育を目指せばよいのだろうか。そこで、発声訓練等を考察する基として、本論では現職保育者へのインタビューにより、保育における発声の実際や、発声に関する考えについてまとめることを目的とした。

なお、本論ではスキルという用語を使用する。スキルとは、能力、熟練、技術という意味で、「ある目標を達成するために効果的な一連の選択をし、それを実行する能力」である(R. ネルソン・ジョーンズ, 相川(訳), 1993)。したがって、コミュニケーションにおけるスキルも、一般的なスキルと同様に上手・下手があり、評定が可能である。おとなしい、怒りっぽいなどの性格に起因することなく、訓練や練習によって上達し、習得できる能力と考えることができるためである(相川, 2000)。また、話し方と発声自体の効果を分けて判

断することは困難であったため、適時、発声、話し声、話し方といった言葉を使った。なお、園長らの言葉および後述の構成概念、理論記述で得られた言葉には「」を付けた。

方法

1. 面接調査

A県内の保育園、幼稚園の園長または主任11名、および、2年目保育者6名に、個別で半構造化面接を実施した。2年目保育者のうち4名は電話にて行った。実施時期は2017年6月~9月で、調査時間はおよそ15~30分であった。なお、いずれの調査協力者にも調査目的および個人情報の保護について伝え、承諾を得ている。

質問項目は園長・主任(表1)と2年目保育者(表2)で分け、カッコ内の例を挙げて補足し、各回答者がさまざまな状況を想定して回答できるようにした。なお、表1の質問2にある「大きな声」という言葉には、怒鳴る、がなるといったニュアンスや、不快さが感じられることが予想されたが、他の言葉の言い換え(例えば「張りのある声」「響く声」など)による認識のずれを避けることと、「大きい声」に対して意見が出やすいと予測し、あえてこの言葉を使用することにした。回答は、要・不要をたずねてから、その理由をたずねる方法をとった。質問4は、子どもの発声モデルとして、保育者の発声に対する意識や考えがこの質問より垣間見えることを予測し設定した。質問5は、吸音材設置により保育室の残響音が減り、会話の音量がコントロールされる(志村, 2003)。人的な発声以外に、物理的に音への配慮や整備がなされているかをたずねるため設定した。

表1 園長・主任への質問項目

質問1: 子ども全体に話をするときの発声状況(保育室や遊戯室、運動場、保育のさまざまな場面や状況において)
質問2: 保育者に大きな声が出せる能力は必要か
質問3: 本人および周囲の保育者における喉の不調、発声の悩みの有無(喉の痛み、かすれ声、声が出ない、声が小さい、ポリープの手術など)
質問4: 園児への発声指導(劇、歌など)
質問5: 音環境の配慮の有無(畳やカーペット、吸音材などの設置など)

表2 2年目保育者への質問項目

質問1: 初年度および本年度の担当年齢
質問2: 発声状況および大きな声を出す場面と頻度
質問3: 喉の不調、発声の悩みの有無

2. 分析方法

園長・主任の回答のうち、質問1「子ども全体に話をするときの発声状況」については、SCAT (Steps for Coding and Theorization.) により分析を行った。SCATとは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記入し、①データ中の着

目すべき語句、②それを言い換えるためのデータ外の語句、③それを説明するための語句、④そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコード化する4ステップのコーディングと、④の構成概念からストーリーラインをつむいで、そこから理論を記述していく手続きからなり、小規模の質的データの分析にも適した比較的容易な方法で、近年、多様な分野で使用されている(大谷, 2007, 2011)。今回は複数の回答者から似通った内容が回答されることが多かったため、福士・名郷(2011)による方法を参考にし、小データごとに予め切片化し、テーマ別にグループ化してから分析を行った。

SCATによるストーリーラインと理論記述を表3、表4に示した。ストーリーライン中の下線は、構成概念として導き出された言葉である。なおSCATの①から④のコード化の過程は紙幅の関係で記載を省略する。

園長・主任への質問のうち、質問2から5および2年目保育者の回答は、SCATによる理論化までの必要がないと判断し、

それぞれ質問ごとに共通する回答内容をまとめ、必要に応じて回答者数をカウントした。その後これらの回答結果と、SCATで得られた結果とを関連させて考察した。

結果

1. 園長・主任からの回答

公立保育園園長5名、私立保育園園長2名、私立保育園主任2名、私立幼稚園園長1名、私立幼稚園主任1名、合計11名より回答が得られた。保育経験年数は、15年以上1名、20年以上3名、30年以上7名であった。

【質問1】子ども全体に話をするときの発声状況(保育室や遊戯室、運動場、保育のさまざまな場面や状況において)

表3 ストーリーライン

保育者は明るい声質で、ゆっくりと自然に話すことが望ましいが、明朗さは態度にも求められている。

理想的なベテラン保育者は子どもとの信頼関係の上で話をしており、子どもの人数や対象年齢、子どもの状況や場面によって、子ども自身の受け入れや理解、集中を見計らい、多様なスキルを意図的に織り交ぜて話を展開している。それらのスキルは、一つ目に、声の大きさ、高さ、抑揚、声色の適度な変化といった発声や話し方のスキル、二つ目に、表情、沈黙や間合い、距離といった非言語コミュニケーションのスキル、三つ目に、発声以外のスキル(ピアノや手をたたく音で注目を集める、クイズや手遊び歌などで関心を引き寄せるなど)である。

そして、次のような使い分けがされている。対集団場面では、大勢の子どもに届くように明るく澄刺とした通る声で、ゆっくりと話される。特に、話を始める導入場面では、注目を集めるために合図として大きい声が出されたり、反対に、集団全体を落ち着かせ、集中を得るために沈黙や小さい声が使われたりする。また、対象年齢によっても使い分けがなされており、3歳未満児では年齢が低いほど、個別で、低く柔らかい声で、穏やかにゆっくりと話される。幼児では、クラス人数の増加と、発達により子どもの声量が増すため、保育者にある程度の声量を要する場面が増えるが、一旦子どもたちが注目し話を聞く態勢ができれば、自然な話し方がされ、時にはむしろ小さい声が使われる。その発声は落ち着きをもたらす、聴覚過敏をはじめ多くの子どもに受け入れられる。

また、このような保育者からの発信だけでなく、子ども自身が主体的に話を聞く態度を育成する言葉掛けもなされている。

このような表現スキルの習得や臨機応変な対応力は、経験の浅い保育者の課題の一つである。

表4 理論記述

- ・保育者は明るい声質で、ゆっくりと自然に話すことが好ましい。
- ・自然な話し方、小さい声は子どもが落ち着き、多くの子どもに受け入れられる。
- ・理想的なベテラン保育者は、子どもとの信頼関係の上で話をし、子どもの人数、対象年齢、子どもの状況や場面によって、子ども自身の受け入れや理解、集中を見計らい、多様なスキル(発声や話し方のスキル、非言語コミュニケーションのスキル、発声以外のスキル)を意図的に織り交ぜて使用している。
- ・場面による使い分け：対集団場面では、明るく澄刺とした通る声で話される。導入場面では、合図として大きい声で注目を集めたり、沈黙や小さい声によって集団全体を落ち着かせ、集中を得たりする。
- ・対象年齢による使い分け：3歳未満児では年齢が低いほど、個別で、穏やかにゆっくりと話される。対幼児では、ある程度の声量を要する場面が増えるが、話を聞く態勢ができれば、自然に話し方がなされる。
- ・子ども自身が主体的に話を聞く態度を育成する。
- ・表現スキルの習得や臨機応変な対応力は、経験の浅い保育者の課題の一つである。

以下に、回答の中で目立った特徴的な事項をまとめた。

- ・「普通」という言葉が頻繁に使われた。特別な話し方ではない普段の声や話し方と説明があった。
- ・明るい声質以上に笑顔、明るい性格や態度について言及があった。
- ・「元気な声」は保育観へ言及し、賛否両論があった。
- ・保育現場には基本的に大きな声は必要ないと考えられている。

【質問2】保育者に大きな声が出せる能力は必要か

この質問に即答したのは2名（いずれも「必要」と回答）で、多くが少し考えてから「どちらか言うと必要」と回答したことが特徴的であった。図1に示したように、「必要」3名、「どちらか言うと必要」6名、「不要」2名であった。

3名 必要	6名 どちらかという 必要?	2名 不要
----------	----------------------	----------

図1 大きな声が出せる能力は必要か

回答は、以下のようにさまざまな場面や考えが含まれていた。「普段の活動では必要ない」が、「状況によって使い分け」ており、発声の能力として「出ないよりは出た方がよい」（5名）と考えられている。大きな声の使い分けとして、「危険回避・緊急時」（8名）、クラス運営において必要（2名）、「外遊びの招集の第一声は大きな声を出す」が、「普段の活動では必要ない」（1名）という回答であった。

大きな声に対する言い替えがなされたものもこの設問の特徴で、「元気な声」「明るく」「聞き取りやすさ」「はっきり」という言葉に替えられた。保育者の声質は個人の生まれ持ったものとしつつ、声が通りにくいと遠くの子どもには聞き取りにくい、「ボソボソ」とこもった声や話し方は届かない、反対に「大きすぎる声しか出せない」という声量のコントロールができない保育者の事例が話された。

また、「現場に出れば何とかなる」「現場の先生はみんな（大きな声が）出る」という回答もあった。

「不要」と回答した2名の内、1名は声のパワーではなく、そのときの子どもの気持ちに寄り添った言葉掛けを考慮することが重要とし、もう1名は都市部の園のため、子どもの声ではなく職員の声に対する近隣の苦情があったことと、それ以上に子ども主体の保育方針に大きな声は不要という回答であった。

【質問3】本人および周囲の保育者における喉の不調や発声の悩みの有無

9名より回答を得られたが、全員から回答者本人もしくは周囲の保育者に何らかの発声トラブルについて回答があっ

た（複数回答）。以下は、発声トラブルの内容や原因として述べられたことをまとめた。（図2）

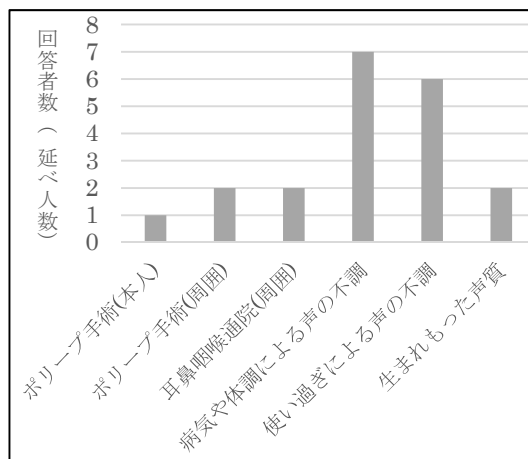


図2 発声トラブルの内容や原因

- ・本人のポリープ手術：1名
- ・周囲の保育者のポリープ手術：2名
- ・周囲の保育者の耳鼻咽喉科通院：2名
- ・病気や体調（風邪、花粉、疲労）による声の不調：7名
- ・使い過ぎによる声の不調（かすれ、出しづらさ）：6名
- ・生まれもった声質（声が通らない、低過ぎる）：2名

- 使い過ぎの状況として以下が挙げられた。
- ・幼児クラスの担任（人数の多さ、成長により子どもの声量は大きくなる）
 - ・人数が多さ（第二次ベビーブームの頃は1部屋に30名以上が在籍した、他クラスの担任が休暇をとると一人で大勢を見た）
 - ・過剰に大きな声を出す子どもが多い時
 - ・時期や保育内容：運動会などの行事前、楽器練習の開始時、新学期や5月頃（慣れと疲労がたまる）
 - ・新任時代の保育技術の不足（3名）：「がむしゃら」「声を張り上げた」「声しか技術が無かった」

一方、この質問から派生して、以下のことが述べられた。

- ・風邪などで声が出ないとき…身振り手振りの使用。しかし、「やりにくく、声が出ないと保育にならない」
- ・話し方の技術…「声のトーン」「声の使い方」「抑揚」の工夫をする。

・集団づくり…子どもと保育者の信頼関係やルール作り
また、独自の保育スタイルを展開する園では、子どもの自然な姿を大事にするゆえ教え込むことはしない、という理由で発声のトラブルはないとの回答を得た。
1名より定期健康診断の項目に、喉の痛みや声の出しづらさをたずねる質問がある、という情報を得た。

【質問4】園児への発声指導（劇、歌など）

劇や歌の練習においてどのような指導をしているか、という質問に対して、図3のような回答が得られた（複数回答）。

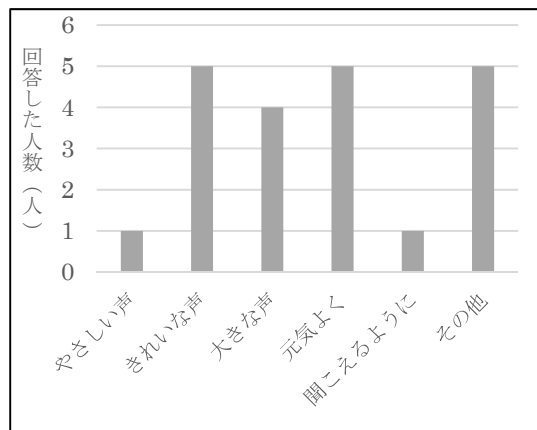


図3 園児への発声指導時の言葉

年齢によって歌うときの言葉掛けが変化し、年齢が上がるほど「やさしい声」「きれいな声」という言葉掛けをし、年少・年中児には、「元気よく」「元気な声で」という言葉掛けをするという回答の傾向があった。また、年長児にも「大きな声」を使用するという回答があった一方で、「大きな声」という言葉は使わないと明言する回答が2名からあり、怒鳴って歌わないように言葉掛けを工夫する回答もあった。その他に、以下のような回答があった（延人数）。

- ・「聞こえるように」1名
- ・「口をしっかりと開いて」1名
- ・「歌詞の意味を考えて」1名
- ・「伴奏をよく聞いて」1名
- ・「保育士が（きれいな声の）モデルになってほしい」1名

【質問5】音環境の配慮の有無（畳やカーペット、吸音材などの設置など）

1 配慮あり	6 配慮無し	4 無回答 回答不明
-----------	-----------	------------------

図4 音環境への配慮

図4に示したように、音環境へ配慮していると回答したのは1名（公立保育園）のみであった。この園では、幼児クラスの床に吸音材を使い、隣室同士の保育者が壁越しに背中合わせの向きで立つように教室配置をし、保育者の話し声が反対方向へ放出されると述べられた。その他の園では、乳児室に昼寝のための畳が敷かれ、またある市では、公立保育園の幼児室の一角に、畳もしくはじゅうたんのままごとコーナーを設置しているが、いずれも、吸音材の役割という観点ではなかった。

2. 2年目保育者からの回答

2年目保育者へのインタビューの回答を表5にまとめた。ABCの3名は、2年間比較的年齢が低く、小さい集団や複数担任に配属していた。Eに嘔声のみられた以外、その他には病気時以外に発声に問題はなかった。Eはもともとよく話し活発なタイプで、2年間幼児クラスを担当しており、「常に大きな声を出して」「ずっとしゃべっている」状況が回答された。ABCDの4名はもともと声の小さいタイプで、共通して1年目より会話量が増加し、「声が出るようになった」と回答があった。5名が共通して普段は「普通の声」で話すのが、「ずっとしゃべっている」状況で、中には叱る、怒るといった行為が語られた。園長・主任の回答に目立った「子どもに寄り添う」という言葉はみられなかった。

表5 2年目保育者の回答

保育者勤務先	A (保育園)	B (保育園)	C (保育園)	D (幼稚園)	E (幼稚園)	F (幼稚園)
担当年齢	0～1歳児	3歳児(複数担任)	3歳児	4歳児	4歳児	3歳児
昨年度	0～1歳児	3歳児(複数担任)	2歳児(複数担任)	3歳児	3歳児	3歳児
発声 の 状 況	合同保育(40～50人)で手遊び、絵本の読み聞かせをするが、静かに聞くので普通の声で話す	よくしゃべるが、普通の声で話している	しゃべりっぱなし。よく怒る。昨年度は2歳児複数担任のため話すことは少なかった。	普段は大きい声はいらない。	ずっとしゃべっている。	子どもの主体性を大事にする園方針で、指示は少ない

大きな声を出す場面と頻度	保護者が迎えに来たときに、(大きな声で)子どもの名前を呼ぶ。(毎日)	言及なし	3歳児は喧嘩が絶えないので、出し過ぎることは日常茶飯事。	怒るときは、声を張る。	常に大きな声を出している。	特にない
喉の不調	喉が痛い。病気的时候は声が出なかった。	特にない。風邪のときに出なかった。	風邪のときに出なかった。	病気になった時、声がカラカラになった。	毎日、午前中はガラガラ声になる。	特にない
その他	元々声は小さい。昨年よりはよく話すようになった。	元々声は小さい。1年目より2年目の方がよく(声)出る。昨年、指導の先生より腹式呼吸を意識していないと言われた。	元々声は小さい。声が出ないことはなくなり、ずいぶん慣れてきた。子どもの個性やグレイゾーンの子への対応で。	前より出るようになった。4年目の同僚に、声の出し過ぎで声の枯れた人がいる。	元々よく話し活発。	元々よく話す。先輩に、午前中だけガラガラ声になる人がいる。

考察

SCATによる理論記述から、保育者の発声、話すことの特徴に大きく次の3点が挙げられる。まず一つ目に、保育者は基本的に、明るい声質でゆっくりと自然に話すことが好ましいとされる。二つ目に、場面、子どもの状況や人数、対象年齢によって声の使い分けがなされており、なおかつ、非言語的コミュニケーション・スキルや、興味関心を引くための音声以外のスキルを意図的に織り交ぜている。三つ目に、理想的なベテラン保育者は、子どもとの信頼関係の上で話し、二つ目に挙げた多様なスキルを臨機応変に駆使する保育技術を有している。米山(1997)は著書の中で、幼稚園では騒音の中でしゃべるので大きな声が必要と述べているが、現代の保育では自然な話し方を重視しながら、意図的で計算された発声・話し方も行われていることがこの理論記述から導き出された。つまり、常に大声が出されているわけではなく、むしろ子どもの理解を含めた幅広いスキルが要求されている。そして、この理論記述が導き出された背景には、コミュニケーションの対象が大きな発達的変化をとげる0歳児から5歳児であり、コミュニケーションが日々の生活の中で展開されている、という保育ならではの特徴がある。

以下は、その他の質問の回答結果を参照しながら、保育者の発声に関する現状や考えを考察していく。

1. 実践知により培われるスキル

経験の浅い2年目保育者のインタビューの回答では、園長らの回答に頻出した「子どもに寄り添う」という言葉はみられず、反対に「すっとしゃべっている」状況が語られており、園長らが指摘したように「声にまかせて話す」状況がうかがえた。また、園長ら自身も経験の浅い頃は「声しか技術が無かった」と述べていることから、理想的なベテラン保育者がもち得たコミュニケーションにおける保育技術は、日々の保

育を積み重ねる中で培われてきた実践知ということができるであろう。発声・話し方のスキル向上のみでなく、子どもの理解を深めることで、そのスキルは生かされ、子どもに寄り添う保育が具現されるといえよう。

2. 声が伝えるもの

話し声は高さ・大きさ・音色・呼吸持続の4要素が絡み合って特徴づけられ(文殊, 2016)、母音と子音の構音の組み合わせにより言葉や文章を成り立たせることで恣意的意味が付随し、抑揚、滑舌、語の強調、話す速度などによって、その語や文がもつ意味とは異なる次元で印象(例えば、説得力のある、せっかちといったイメージ)を与える。

園長らの回答では、「小さい声」で話すことで、子どもはその場の空気を感じとって保育者の話に集中し、「明るい声」によって「子どもは安定した気持ちで1日を過ごす(1名の園長の回答)」ことができるという。つまり、子どもは保育者の声質から状況を感じ取っている。さらに、保育者が「元気な声」を発することで「子どもも元気になる(1名の園長の回答)」という回答では、声は単なる発声の次元から保育観を具現化する一つのツールとなっている。つまり、声そのものが形而上で人に与える力をもっていることがうかがい知れる。

また、構成概念で得られた「明るい声質」を再度、園長らが実際に語った言葉に還元すると、「明るく元気な声で」「張りのある」「明るく弾んだ声」「(全体に話すときは)トーンを上げて」「甲高いというわけではなく、やや大きめの声で」といった主観的な感覚やイメージの言葉で表現されていた。そこで、大勢の子どもに声が届くように「ややトーンを上げる」という表現について考えてみたい。トーンは音、音調の他に、全体から感じられる気分・調子を意味する(デジタル大辞泉)。トーン、つまり、音声自体や発声の気分や調子を

上げるための努力は、呼吸筋や表情筋など身体へ何らかの影響を与えられ、その結果、物理的に声量が増したり、音高が高くなったりすることで、声は「明るさ」「張り」「澁刺さ」を帯び、共鳴して「声を通る」ようになったと推測できる。「やや」という言葉が付与されたのは、複数の回答者が否定した「甲高い声」「キンキン声」ではないことの婉曲と思われる。つまり、大勢の子どもに声を届けようと、おそらく無意識でシフトアップされた声量・音高・声質が、「ややトーンを上げる」というイメージ表現につながったと考えられる。

拡大解釈や忖度をする大人とは違い、子どもは言葉の意味より先に保育者の声の調子や音のおもしろさに体で反応（河合・坂田・谷川・池田、2002）し、特に乳児は話し手の感情や雰囲気や注意を向ける（志村、2008）ため、保育者の話し声の影響を直接的に受け取るといえる。伝える内容や言葉の選定が重要であることは言うまでもないが、子どもにどう受け取られるかまでの観点で、どのような声でどのような話し方をするのがよいか考慮することが大事である。この点が、理想的なベテラン保育者のもち得た保育技術といえよう。

3. 「大きな声」に対する異論と現実

ここでは「大きな声」を軸に、質問2から5の回答を参照し、保育者の発声について検証した。

「保育者に大きな声が出せる能力は必要か（質問2）」では大声ではなく、その発声能力をたずねたが、回答者が一旦考えこむ時間が目立ち、「大きな声」という言葉への違和感や抵抗感がうかがえた。「大きな声」は危険回避、大人数の場面、外遊び、場面の切り替えで出されることがあるが、危険場面以外ではあえて小さい声や沈黙を使う工夫もなされていた。周囲の騒音レベルに合わせて話者が話し声を調整するロンバード効果（Lane and Tranel, 1971）というが、保育者が大声で話せば、子どもも声を大きくすることが経験から認識されており、普段は自然な発声・話し方が心掛けられ、穏やかで落ち着いた保育環境を目指す意図が背景にあると考えられる。

一方、「本人および周囲の保育者における喉の不調や発声の悩みの有無（質問3）」の問いでは、何らかの発声トラブルを経験した保育者は少なくなく、その原因として風邪などの病気以外に、声を使い過ぎる時期や状況（幼児クラスの担任、大人数、行事前、新学期、新任時代）があることが示唆された。

もう一つ別の視点から発声についての考えをたずねた質問4の「劇や歌の練習において、園児にどのような発声指導をしているか」では、保育者の発声で「大きな声」に慎重であったのに対し、子どもへの指導では約3分の1の回答者から「大きな声」が挙げられた。子どもにわかりやすい観点からと思われるが、その一方で、子ども自身が声を聴きながら発声行動を調整するように「きれいな声で」「伴奏を聞いて」

という言葉掛けもみられた。幼児が力んで大声を出す指導が問われる（志民・今川、2016、他）中、保育者が歌や普通の会話の良いモデルを示すとともに、声についてより思慮深くなり、配慮のある言葉に変換する必要があるのではないだろうか。

以上から、質問2の回答で園長らは「大きな声」に慎重であったのに対し、場面や時期によっては時にトラブルを抱えるほど声を使うことがあったり、子どもに対しては比較的無頓着に「大きな声」を指導することもあったりすることから、園長らの回答と現場との間に差異があるように思われた。これが何を意味するのか、次のように推察した。①「自然に話す」ことは落ち着いた保育環境をつくるための一つの現実であり、保育の理想でもあるため、「大きな声」は不要である。②子どもに届く通る声や外遊びの元気な声と、がなり立てるイメージの「大きな声」は異質のものである。③緊急時や戸外などの一部場面以外で、恒常的に過剰な大声は出されていない。このような考えから「大きな声」は慎重に扱われたのではないだろうか。この推察から浮かぶことは、前述したように声はイメージで語られ、保育観や理想のような観念を携える面があることである。

最後に、多くのベテラン保育者が話し声を和らげようと考える一方で、保育室内の反響音への対処や吸音の考えは浸透していなかった（質問5）。周囲の雑音から選択的聴取能力がまだ育っていない乳児は、騒がしい音をすべて聞き取っているため、静かな環境が望まれる（嶋田、2016；村上、2016）が、実際、2年目保育者1名が、乳児クラスでも午後からは数クラス合同になり、送迎の子どもを大きな声で呼ぶと回答した。園の事情や体制もあるのであろうが、このような状況下で保育者が発声を余儀なくされているのも現実である。適切な人数とともに、保育室に消音などの物理的配慮が早期になされることを望みたい。

4. まとめ～発声への感度向上と発声教育の提言

「声が出ないと保育にならない」という意見があったように、声はコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしながらも、数人の回答者から「生まれもった声質」だからというあきらめや、声が小さい学生も「現場に出れば何とかなる」という楽観的な回答があった。これは、発声教育の機会の不足や、未周知ではないかと思われる。細い声質の人は、腹式呼吸の改善と共鳴腔を作ることによって、人間が聞き取りやすい3000Hz 辺りの高次フォルマント（倍音）を響かせて、通る声にする改善方法がある（米山、1997；鈴木・福島、2005）。日々、現場で声を使うことで発声機能が強化されていくことも事実であるが、1年ほどで嘔声になる事例もあり、発声教育は専門家の指導のもと行うのが望ましいであろう。

声というものは伝達ツールであるだけでなく、印象や感情、保育観までもも携えている。日々、当たり前に使われる発声について、今一度思慮深くなり、感度を向上させることは、

保育の質向上へつながっていくと考える。また、養成段階においては、人前で話すことの苦手さを少しでも克服し、適切な発声法と声の衛生教育の必要があるのではないだろうか。さらには、子どもたちを惹きつけるような豊かな表現力の素養が養われていけば、現場で日々、子ども理解やかかわりを深めながら、その表現能力をブラッシュアップしていくことができるであろう。

長い保育者人生で大きな発声トラブルを避けながら、豊かで多様なコミュニケーション・スキルによって、子どもに寄り添う保育が充実することを願う。

謝辞

インタビューに快くご協力くださった園長先生および主任の先生、そして現場で頑張っている2年目保育者の皆さまに心より感謝を申し上げます。

引用文献

- 相川 充(2000). 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学 サイエンス社
- R. ネルソン・ジョーンズ, 相川 充(訳)(1993). 思いやりの人間関係スキル—一人できるトレーニング 誠信書房 10
- 大谷 尚 (2007). 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 54, 27-44
- 大谷 尚 (2011). SCAT : Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法— 感性工学 10 (3). 日本感性工学会 155-160、
- 河合隼雄・坂田寛夫・谷川俊太郎・池田直樹 (2002). 声の力 岩波書店 148
- 厚生労働省 (編) (2008). 保育所保育指針解説書, 98 フレール館
- 志民一成・今川恭子 (2016). どなって歌う子ども、調子はずれの子どもにどう向き合うか; 今川恭子 (監) 志民一成・藤井康之・山原麻紀子・長井覚子 (編) 音楽をまなぶということ 教育芸術社 19-23
- 嶋田裕子 (2016). 赤ちゃん・子どもと大人の聞こえの違い; 日本赤ちゃん学会 (監修) 小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子 (編著) 乳幼児の音楽表現—赤ちゃんから始まる音環境の創造 中央法規 10-11

- 志村洋子 (2003). 幼稚園・保育所における保育室内の音環境—コミュニケーションを支える音環境 騒音制御. 27 (2). 123-127
- 志村洋子 (2008). いっぱい話しかければ「ことば」は育つ?: 赤ちゃん学カフェ編集委員会 (編) 赤ちゃん学カフェ 1 ひとなる書房 69
- 志村洋子・藤井弘義・奥泉敦司・甲斐正夫・汐見稔幸 (2014). 保育室内の音環境を考える (2)—音環境が聴力に及ぼす影響 埼玉大学紀要. 63 (1). 59-74
- 鈴木松美・福島 英 (2005). いい声になるトレーニング かんき出版 37
- デジタル大辞泉 小学館
www.daijisen.jp/digital/index.html
- 永津利衣・大久保義美 (2015). 保育系学生の発声に関するボイストレーニングの成果 保育士養成協議会第 55 回研究大会発表論文集. 308
- 羽石英里・齋藤 毅・城本 修・ドナ・エリクソン・岸本宏子・八尋久二代 (2013). 音楽療法士を対象とした発声訓練プログラム—開発に向けた予備研究 音声言語医学 54, pp. 186-196
- Harlan Lane and Bernard Tranel (1971). The Lombard sign and the role of hearing in speech. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 14, 677-709.
- 福土元春・名郷直樹 (2011). 指導医は医師臨床研修制度と帰属意識のない研修医を受け入れられていない—指導医講習会における指導医ニーズ調査から 医学教育 42 (2). 65-73、
- 無藤 隆 (監)・吉永早苗 (2016). コラム 保育者の声に対するイメージ; 子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求 萌文書林 p. 141-142
- 村上康子 (2016). カクテルパーティー効果と乳幼児の聞こえ; 今川恭子 (監) 志民一成・藤井康之・山原麻紀子・長井覚子 (編) 音楽をまなぶということ 教育芸術社 78
- 文殊敏郎 (2016). 声の悩みを解決する本 現代書林 56
- 米山文明 (1997). 声がよくなる本 主婦と生活社 175-177, 204-205
- 米山文明 (1998). 声と日本人 平凡社 83